



【短歌】

楠瀬 兵五郎 選

野良猫と目の合ひしとき見詰めれば相手も距離を測り動かず
立ち寄りて脳りハビリとさがす本目線は同じ吾が知らぬ人
ひとり生えの浦島すみれ埋めつくすわが門を誉めてくる人なし
病床の友を見舞えば青年の介護土椅子と花を持ち来る
人は病み人は死につく定めさえうつしみ吾に重なりて来つ
童謡を老いら集いて歌う夜楽しいひと時声は囁かれても
リハビリを終えて帰りしわれを見て尻尾ふりつつキューーンとなく犬
石垣に房実の熟る夏苺み墓につづく古里の山
去年うめし生ごみの土耕せばスプーンが出づかがやき失せて
十七才余の七月の婚たのしまずぼつたりと重かりしは木綿青蚊帳
ブラウスの風にゆれるペランダにアーチ型せる蔓の紅バラ
吹く風にしないでおどる若柳訪ふ友の家はたのしき
台風も無事にそれ行き納戸より聞えて来るはコオロギの声
望み捨て周り気使つ日々送り淀むところを何にて流す
はるかにも過ぎて忘れてゐたるひと庭に育てる千日紅一むら
傷む胸にかかるき毛布を掛け臥して浅き眠りに浜をゆく夢
幾万の木の葉沈めしこの川に月白く浮き赤き鯉浮けり
ことごとく稔りし稲の倒れおり引き起し引きおこし吾も刈りしを
追剥を知らぬ若者多いといふ追剥峠を人は教へて
さががけて時を知らせる女郎花あつきひと日の風ふくなかに
旅なれぬわれを伴ひくる娘とはるばる巡る白川郷を
濁流が魚道あふれる堰の上をカラスとサギが交差して飛ぶ
双手には長男長女ハートに夫聖書を読みわかれは安らか

山崎かつみ 竹村 稔美 横田直加子 蓮池 和子 尾立 かよ 岡崎 和枝 竹村 松子 門田 喜美 森 晶子 大岸由起子 大久保 操 鍵山 みつ 山崎みどり 横山 淑子 坂上のぶ子 小松もとみ 前川 竜女 秋山 正美 都築 初代 小野川恵仁 田村 房子 佐々木真理 古屋 由美

霊場を廻つておればもう少し長生きしたかと母に詫びいる
暑い日々水死の事故を今日も聞く遠き日の子の姿ふたたび
夫の介護出来る幸せふと思つさるる身ならば何とすべきや
空高く葎生太鼓のこだまして金婚式に臨む父母
草茂る前を我が刈るは農のルール八十歳守りおおさむ
水やりに丹精こめし夏キュウリ実りを待ちて朝々通う
ひっそりと家のいすこに居住いてこの夜こおるぎ鳴き始めたり
絵手紙に優しさ満つる友の顔するどき一筆に元氣わき来る
語らいの言葉少なし夕餉にも夫もくもくと箸を取りおり
街に住む孫と歩めば立ちのぼる霧乳色と幾たびも言う
床板の黒びかりする学問所三百年の歴史を思ふ
青く澄む十和田湖を吾ら船にめぐりまた美しき奥入瀬行けり
鎌の柄にすがり目に追ふ機影ひとつ東京に住む子らに会ひたし
出そろひし貝割大根に水を撒く驚きたるか少しふるふ葉
色とりどりの柿の落葉をさがしをり外出かなはぬ母を思ひて
ほとばしる水にリュウキュウ洗ひきぬ今夜は鮮魚に酢の物とせむ
母さんもいつまでも五十五ではない叱咤激励と子に言ひ放つ
両の手を孫は器用に動かしてハスの白露を廻して飽きず
ひとを送りて心虚しき幾日かわが家をつつみ雨降りしきる
長かりし雨も明けたりわが作る葡萄色づくを待ちかねて居る
草木らは季のセンサー持ちいるかホトトギス一花今朝開きたり
店頭にかボス並びてレシビ変え五個の緑はわが手の中に
思いさえ言えず見送りし村の駅七つ鉦の眩しさセピア色して
穂のかすれなだめて書かむ金粉を散らしし紙に落人の歌
いたいけない蝶の飛行の二千キロアサキマダラは孤独を知らず
中州まで満ちくる潮輝けばキチキチは飛ぶかたへの草に

大利佳都香 和田 利衛 公文多賀子 山崎 貴子 高野 和一 小野寺朱実 武内 弘子 谷内 務 公文 千恵 吉本 悦子 門田 明子 北村佐喜子 公文 正子 高橋 章 竹村 咲子 出原 久子 古川 安子 宮地 亀好 三宮のり子 森本眞理子 長谷 千鶴 大石 信子 法光院俊子 町 耿子 佐竹 玲子 楠瀬兵五郎

俳句・短歌の作品は、企画課内・広報委員会事務局へご投稿ください。